

自分を変え、状況を変える

上廣榮治

春は名のみ風の寒さや……という「早春賦そうしんぷ」の歌詞が思い出される季節です。歳時記にも、「余寒」「春寒し」「春遅し」「春浅し」など、春にぶり返す酷寒についての言葉がたくさんあります。寒さが厳しい日には、コートの襟に首をすくめて縮こまり、元気までもが萎縮いしゆくして、快活さや「上機嫌」を失いがちです。

しかし、そんな寒さも快適だと思えることもあります。ゲレンデをスキーで滑降すれば、頬をかすめる寒風さえも快適です。まして親しい誰かと一緒なら、もっと心は温かでしょう。

あるいはまた、合格発表を見に行った寒い朝の出来事を嬉しく思い出す人も多いでしょう。しかしその一方で、ひとしお寒さが身にしみた人もいるはずですよ。

嬉しい気分だから寒さも感じない、悲しい気分ならいつそう寒く感じられるというのは、いわば当たり前前のことです。

しかし私たち実践者は、常に「快活であろう、上機嫌でいよう」としているために、寒さも快適だと感じられる。これではなくてはいけません。

世の中には稀まれに天性の素直さと快活さで、どんな過酷な状況も快適なものに変えてしまう人がいます。多くの志士を輩出したことで知られる松下村塾しんげくの主宰者、吉田松陰もその一人です。

松陰は国禁を犯してアメリカに密航を企てて失敗、投獄されます。ところが、楽天的な彼は牢内にあつても、監獄の改革案の（のちの「福堂策」）を考え、実行さえしたのです。

長州藩の野山獄のやまごくには、すでに十一人の入牢者がいましたが、彼は最年少の新入りながら、その誠実な人柄からすぐに信頼を得て、問われるままに自分の体験談などを語り、やがて『孟子』の講義まで始めるようになります。

出獄できるあてもない囚人たちが、希望を失っていることに心を痛めた松陰は、あるとき、「互いに無為むゐに過ありてもしかたがない。これを機会に習い事をしてはどうか」ともちかけます。そして、書のうまい入牢者を説いて書の師匠とし、皆で習い始めたのです。

次いで、俳句が得意な入牢者を見つけると、皆を誘つて弟子入りします。やがて、ほとんどの囚人が松陰によつて何らかの長所を見出され、師匠になつて、互いに教え合ひ学び合うようになっていきます。

それまで、何の心の張りもなく、ただ生きているだけであつた人々に、急激な変化が現われます。松陰をはじめ囚人たちから「師匠」「先生」と呼ばれて尊敬され、一生懸命に弟子たちの面倒を見ようとするので、たちまち彼らの表情があらたまり、言動までもが美しいものになつていったのです。

なかでも、松陰が獄中で最初に弟子入りした囚人は、病的なほどのひねくれ者で、彼がいるだけで周囲が暗澹あんたんたる気分になるために、親戚や同僚が謀はかつて獄に投じてもらつたというほどの変人です。心底しんぞこ人を憎み、誰をも認めようとしなかつた狷介けんかいで誇り高いこの男が、十歳も年下の松陰にだけは心を開き、「尊師」と崇あがめるまでになつたのです。

松陰が心から彼の長所を敬愛していることに感心したからに違いありません。どんな悪人も変人も、自分の長所を認められ、師匠として立てられるということは、何にも勝る喜びだったのでしよう。わずかの間に、彼らのことごとくが松陰を慕うようになり、改心してしまいます。それだけではありません。司獄官や看守たちまでもが松陰に私淑ししゆくしてしまいます。

松陰の天性の素直さと快活さが、監獄という、この世で最も劣悪であるはずの環境を、学びの場に、自己を回復し、さらに高めることができる仕合わせな場に、変えてしまったのです。

この奇跡のような事実は、松陰のように天性の資質に恵まれた人であってはじめて可能なのでしょうか。私ははっきりと「違う」と断言できます。

なぜなら、この『倫風』誌の各号に掲載されている「わたしの体験」や「訪問 倫風ファミリー」「朝のスピーチレポート」などを見てください。自分が置かれている状況を「より善いものにしよう」「もっと仕合わせになろう」と志し、倫理の実践によって、その願いを実現したという実例が、数限りなく語られているではありませんか。

人は誰でも、より善くあろうと心に決め、正しく実践を重ねれば、いたらぬ自分も、どんな過酷な状況も、「より善く」変えることができます。しかしその反対に、今の自分に甘んじて、学び、努力する気のない人には、この奇跡が起こることはありません。

吉田松陰の獄中生活は一年二か月で終わり、その後は自宅ちつきよに塾居して、松下村塾を開くことになります。この、塾を開いた理由というのが、いかにも松陰らしいものでした。

松陰は書いています。自分が塾を開くのは人に教えるためではない。世にすぐれた人を見つけて親しく交際し、自分のとらわれているところを解き放ち、愚かなところを矯正したいためである、と。自分自身が塾

生から学ぼう、自分自身を高めようとしたのです。

松陰が塾生たちと、まったく対等に付き合ったこと、鄭ていぢやう重な言葉遣いで接したことの理由がここにあります。彼にとつて塾生たちは、共に学ぶ仲間であり、師匠でもあったのです。

彼は獄中でそうであつたように、塾生一人ひとりの長所を見つけては、「君はここが際きわ立つてすぐれている」と示しています。自分がどんな長所を持ち、どんな可能性を持っているかは、なかなかわからないものです。ところが松陰によつて、それをずばりと指摘されれば、誰もが感激し、心の底から奮い立つて、自らの可能性を追求することになります。

しかし、松陰は彼らをただおだてたのではありません。彼自身も行動し続けたのでした。

高杉晋作、久坂玄瑞くさかげんずい、伊藤博文、品川弥二郎など、幕末の日本を動かした彼らはみな、行動者としての松陰の背中を追つて、駆け出した人たちだったのです。

寒さの厳しい朝ならばこそ、「今日一日、快活な気分でいよう、上機嫌であらう」と心に決めて元気いっぱい実践努力すれば、心も身体も温かくなるでしょう。

寒々とした話ばかりが聞こえてくる昨今ですが、そんな悲観的な話に怯おびえて首をすくめていても、どうなるものでもありません。私たちは、希望を失つた囚人になつてはならないのです。

自分と自分が置かれた状況を少しでも「より善い」ものにしようと強く決意し、希望の実現に向かつて歩み続ける。それが実践者というものです。

